

## 多面的な授業評価アンケートによる年度間比較

—同一授業における 2008 年度調査と 2011 年度調査との比較—

幼児教育講座・深田昭三

### 1. 授業とその構成

幼児心理学演習は，幼年教育専修の必修科目であり，保育士コースの選択科目である。本年の受講生は幼年教育専修の3回生7名であったが，うち1名が途中で受講を取りやめている。

この授業はいわゆる演習スタイルで進めている授業であり，昨年度から授業で使用するテキストとして，全米幼児教育協会（National Association for the Education of Young Children: NAEYC）が発行する雑誌の一つである Young Children を取り上げている。毎回1名の担当学生が，この雑誌の近年の論文の中から1編を選び，要約した上で発表する。授業では，この発表にもとづきディスカッションをしながら進めるが，海外の保育事情にはあまりふれたことのない学生が多かったため，適宜教員の方で情報を補いながら授業をすすめた。

### 2. 授業評価の概要

本授業の評価は，最終回である第15回目に行った。評価項目は，2008年度に行った(1)～(3)の評価に加えて，今年度は(4)の調査も行った。

- (1) 通常の授業評価項目
- (2) CCL と対応した評価項目
- (3) 授業全体をとおしての自由記述
- (4) DP と対応づけた授業評価調査

### 3. 通常の授業評価の結果

この評価は表1に示した10項目からなっていた。問1は「①そう思う～⑤そう思わない」，問3～問10までは「①強くそう思う～⑤全くそう思わない」の5段階で評定を求めた。問2については，「①2時間以上②1時間以上③1時間未満④30分程度⑤30分未満」の中から選択を求めた。

評定結果は図1に示した。10項目の平均が2008年度には4.24であったものが，本年度は4.78に上がっており，この評定値の最大値が5であることを勘案すると，きわめて高い評定結果であると言える。とりわけ問2の予習・復習時間に関しては，2008年度が30分以下であったのに対し，本年度は全員1時間以上であり，大きな違いとして

表1. 通常の授業評価項目の質問項目

1	【学習者の意欲】 あなたはこの授業に積極的に取り組みましたか。
2	【予習・復習】 授業の予習・復習は平均して，毎回どのくらいしましたか。
3	【わかりやすさ】 授業内容や説明の仕方は分かりやすかった。
4	【進度・時間配分】 授業の進度および毎回の授業における時間配分は適切だった。
5	【関心・興味】 この授業で取り上げられた事柄について，関心・興味がわいた
6	【有用性】 授業内容は自分の将来の進路，人生にとって役立つと思う
7	【コミュニケーション】 授業内容への質問・意見発表や，授業方法へのコメント発表（口頭でも記述でも）の機会が適切に与えられ，教員はそれにきちんと対応した。
8	【教員の意欲・熱意】 教員の授業に対する意欲・熱意を感じた。
9	【満足度】 本授業は全体として満足のものだった。
10	【おすすめ度】 本授業の受講を他の学生や後輩にすすめたい。

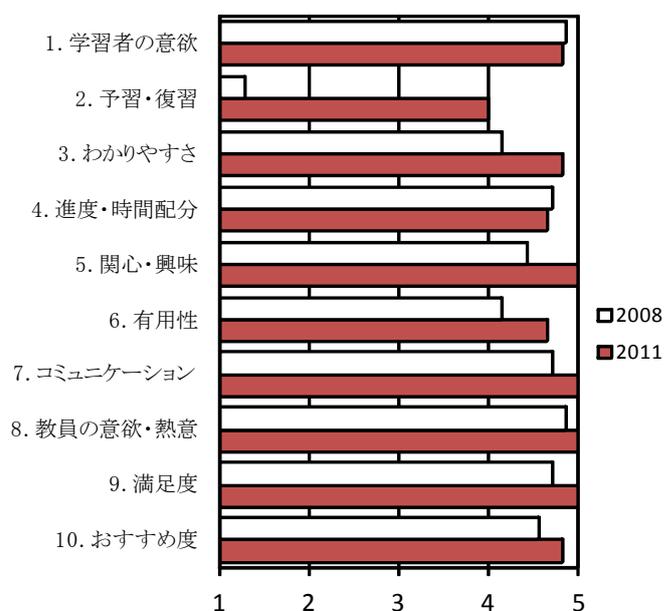


図1. 通常の授業評価項目による評価結果

特筆できる。そのほか，「わかりやすさ」「関心・興味」「有用性」についての項目においても相当な改善が見られた。

#### 4. CCL と対応した評価

CCL と対応付けた評価には、2008 年度に作成した表 2 の評価項目を用いた。ここでは、CCL で本授業と関連ありと指定した 4 項目を、ほぼそのまま質問項目にしたものである。どの項目についても「①強くそう思う～⑤全くそう思わない」の 5 段階で評定を求めた。評定結果は、図 2 に示した。「現代的教育課題への意見」と「専門的知識・技能」については大きな伸びが見られた一方、「具体的な対処法」と「授業案の作成等」に関わる問いについては伸び悩んだ。

#### 5. 授業全体をとおしての要望・感想

自由記述から代表的な意見としては、次のようなものがあつた。多くの学生が英語に格闘した苦労を述べるとともに、海外の新しい知識を得、そこから日本の保育を見直すことができたと言っていた。

- ・初めは英文を日本語訳し、それをさらにレジュメにしてまとめるということで、どれほど大変な授業なのだろうと不安を感じていました。しかし、いざ授業を終えてみると、確かに発表準備には多くの時間を費やし、大変だったものの、たくさんの新たな知識を得ることができました。今まで、日本の幼児教育における取り組みや、研究についてみる機会はありませんでしたが、アメリカではどういった取り組みが行われているのかは大変興味深く、毎回他の学生の発表を楽しみにしていました。
- ・アメリカの雑誌を読むことで、日本の幼児教育について、より深く考えることができ、また初めて知ることも多かったため、とても貴重な時間になったと思います。日本の幼児教育だけで考えると、当たり前のようなことでも、日本から一歩外に出てみれば、違う場合があることもわかりました。授業を通して学んだ知識をしっかりと理解し、子どもたちとの関わりの中で生かしていきたいと思いました。
- ・教育実習を終えたあとだったので、自分たちの体験とも結びつけながら考えることもできました。全体を通して、一つに固まることなく、幅広くいろいろな実践について考えを深められてよかったです。日本との違いや共通点、取り入れてみたいことなど、新しい視点を得たり、今まで習ってきたことや経験してきたことを振り返ったりと、両方の学びがあつたと思います。自分が考えるだけでなく、みんなで考えていくことで、より学ぶことができたかなと思います。

#### 6. DP と対応づけた授業評価調査

今年度は、DP と対応付けた授業評価調査も新たに行い、その結果を図 3 に示した。この調査は、本授業がどの DP と対応したものであつたのかを学生目から評価してもらうものである。CCL に対応付けた評価が、学生の自己評価であるのと比べ、評価の意味合いはかなり違う。しかし、CCL と対応付けた調査の結果と同じく、DP1「知識・理解」DP2「思考・判断」の両項目では高い評価

表 2. CCL の観点と質問項目

観点	質問項目
知識・理解	1. 得意分野作りのための専門的知識・技能を修得できた。
思考・判断	2. 現代的教育課題を理解し、個々の課題について意見を述べるようになった。
	3. 教育体験と高い専門知識に基づき、教育課題について具体的な対処法を考え、示すことができるようになった。
技能・表現	4. 発達段階を意識した授業案の作成と教材・教具の準備をすることができるようになった。

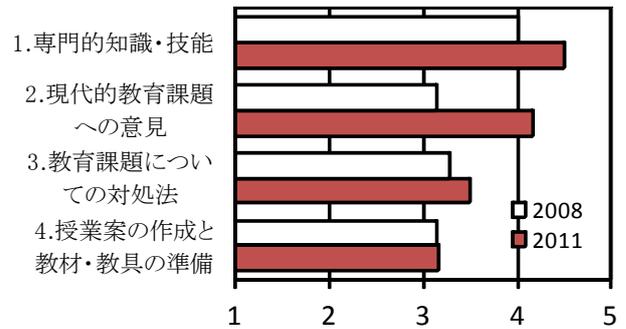


図 2. CCL と対応した評価項目による評価結果

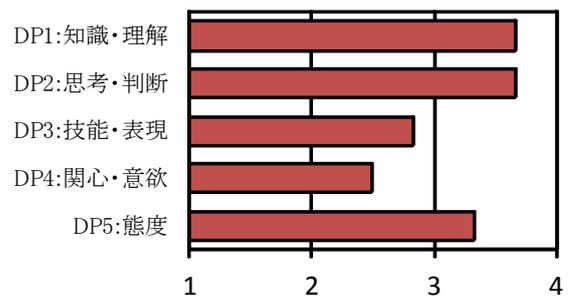


図 3. DP と対応づけた授業評価調査の結果

が得られたが、DP3「技能・表現」ではあまり高い評価であつたとは言えなかつた。DP4「関心・意欲」も高くないが、DP4 の定義が実践の省察を行うことと位置付けられていたためであろう。一方、授業の目的には掲げていなかった DP5「態度」（教職に対する使命感や責任感）の評価が高かつたことは意外であつた。

#### 7. 今年度の評価を終えて

教育評価においては、実践の目標を決め、実践の成果を目標に照らし合わせ、成果を確かめるプロセスを踏む。DP や CCL のような概括的な目標は、授業の目標が授業ごとに個別・具体的であるべきという点からは、評価項目としてふさわしくないかもしれない。一方、概括的な目標では授業間の比較ができたり、授業者が狙っていなかつた波及的な効果を調べられたりする利点もある。DP や CCL が評価項目として使えるだけのものに練り上げられているかどうかも含め、今後評価の在り方を検討・検証していく必要がある。